

〔伯耆之卷〕夜に入て、彌風強く吹ければ、御船も危くて、いかなるべしとも不覺、主上醜忠顯を被

召、竹の葉やあると御尋ね有ければ、船中に可有様なかりけれども、可尋由を勅答申て、御前を立給、かゝりける所に、不思議やな、苦の下に竹の葉一枚あり、是を取て參りけり、此竹の葉を被召、御手自船を三つ造らせ給て、御守より御舍利を三粒取出させ給て、此篠船に一粒づゝ、入させ給て、海上に浮べさせ給て、御祈念ありければ、無程海上静りぬ、

〔夫木和歌抄水〕家集氷礙舟

源仲正

うなひこがながれにうくるさ、舟のとまりは冬の氷なりけり

〔日本書紀神代〕一書曰、先生蛭兒、便載葦船而流之、

〔古事記傳四〕葦船略○中 此船を書記纂疏には、以葦一葉爲船也とあり、さも有なむ、又葦を多く集て、からみ作りたるにてもあるべし、

〔古事記上〕故大國主神坐出雲之御大之御前時、自波穗乘天之羅摩船、而内剝鵝皮剝爲衣服、有歸來神、

〔古事記傳十二〕天之羅摩船略○中 和名抄に、本草云、羅摩子、一名芫蘭、和名加々美、白薺、和名夜末賀

賀美、徐長卿、和名比女、加々美などあり、今の俗は加賀良比とも、賀々芋とも云て、其殼を割たるは、舟にいとよく似たる物なりとぞ、

〔日本書紀神代〕一書曰略○中 大己貴神之平國也、行到出雲國五十狹狹之小汀、而且當飲食、是時海上

忽有人聲、乃驚而求之、都無所見、頃時有一箇小男、以白薺皮爲舟、以鷓鴣羽爲衣、隨潮水以浮到、

〔日本書紀神代〕一書曰、素戔鳴尊所行無狀、故諸神科以千座置戶而逐之、是時素戔鳴尊帥其子五

十猛神、降到於新羅國、居曾尸茂梨之處、乃興言曰、此地吾不欲居、遂以埴土作舟、乘之、東渡、到出雲國、簸川上所在鳥上之峯、